

至誠キートスホームの取り組み

はじめに

当ホームは平成 12 年 4 月に開設したユニット型の特別養護老人ホーム（入居 70 床、ショート 20 床のほか、デイサービス・訪問介護・居宅介護支援事業・地域包括支援センターの事業を展開）で、人口約 17 万人の立川市の北部にあり、付近は農家と公営集合住宅、新興住宅が混在している。

ホームではモデル事業を実施するにあたり、(1)認知症に関する相談・普及啓発事業、(2)認知症高齢者支援ネットワーク構築事業、(3)認知症高齢者サロン活動事業の三つに分けて行った。

I. 実施事業の内容

(1) 認知症に関する相談・普及啓発事業

① 介護者教室の開催

<目的>

地域に住む認知症の方の介護者を対象に介護上のアドバイスや介護する上での悩みや困っていることを話し合うことにより、認知症の理解とケアを深めるとともに介護者を支援することを目的とした。なお、2 回目と 3 回目に行った「家族と職員の相互参加型交流講座」とは、認知症介護研究・研修仙台センターが開発したもので、介護者の家族と、認知症の高齢者が利用しているサービス事業所の職員が、ともに認知症についての講義を聞き、その後、意見交換することを通して本人・家族・関係機関の相互の理解を深め、それにより認知症高齢者と家族の支援を行なうものである。

<実施状況>

回数	内容とアンケートの結果
1 回目 19 年 11 月 21 日	介護者からの報告と助言者によるアドバイス。介護者 6 名、助言者 1 名参加。 助言者：小泉晴子氏「ブーケの会」代表（練馬認知症の人と家族の会） アンケートより、「いろいろな人の意見が聞けてよかった。」「体験談を聞いて自分よりご苦労があり、心強くなった。」との記述あり。「ためになった 1 名、少しためになった 2 名」。
2 回目 20 年 2 月 14 日 実施	「家族と職員の相互参加型交流講座」方式で行う。 介護者 3 名、関係機関職員 10 名参加。 アンケートより「今日の内容は今後に生かせそうだ」11 名、「今日の内容に興味・関心もてた」10 名、「今日の内容は分かりやすく理解できた」9 名、「全体的に満足できる内容だった」9 名。 講義後のディスカッションという形式で、知識を再確認しながら話し合いが出来た。
3 回目 20 年 6 月 28 日	「家族と職員の相互参加型交流講座」方式で行う。 介護者 6 名、関係機関職員 15 名参加。 アンケートより「今日の内容は今後に生かせそうだ」、「今日の内容に興味・関心もてた」、「今日の内容は分かりやすく理解できた」との評価項目の回答が良いと悪いとの半々であった。

	これはグループ討議でも家族が期待していた具体的な提案が乏しかったこと、また今回、グループの司会進行者を若い職員が担当したグループもあり、そのよう厳しい評価になったと思われる。
4回目	男性介護者のための介護者教室として実施。 男性介護者8名。実際に介護をしている男性は5名。女性介護者3名参加。
11月 14日 ～ 11月 28日	14日：「認知症について」講義／至誠キートスホーム職員 17～21日のうちの90分間を認知デイでの実習 28日：男性介護者体験報告（別居の息子、同居の息子）
	アンケートより参加したためになった3名、無記入または少し期待はずれが3名。理論的に納得できた、介護者の話が参考になった、と言う回答もあれば、もっと早い時期に聞きたかった、具体的な対処方法を知りたかったとの回答もあった。「男性の介護者教室」となっていたので女性と違ってなにかあるのかと思っていたが、特に変わりなく物足りなかったと言う声もあった。立川市以外からの参加者が4名。
5回目	キートスデイの認知症の家族会に合流。 介護者3名、キートスデイサービス利用者家族8名参加。
21年 3月 14日	今回の介護者教室はキートスデイの認知症の利用者の家族の会と一緒に参加して行なった。この家族会は毎年、3回から5回開催してきたもので利用者や介護の現状について報告や意見交換をしているもの。初めて参加した家族より、『夫が介護のことであんなに長い時間話をすると思わなかった。話を聴いてもらい気分が楽になった。ほかの方の話を聴いてやっていけそうな気がした』とのことであった。

<取り組みの経緯>

介護者の募集にあたっては、「男性介護者のための介護者教室」では立川市市報のほか、立川市社協での広報と、周辺の自治体の社協にもチラシを置いてもらった。それ以外は、介護者を8名程度にするため、特に大きく広報せず、当ホームの併設の居宅介護支援事業所のケアマネに依頼した。

介護者教室を実施してみて、認知症の高齢者を介護している人の多くが精神的に追い込まれ、なかなか希望を見出せない状況にいたることが分かった。ともに介護体験を語り合い、お互いの状況を出し合うことで介護状況の段階を知り、自分より苦勞している介護者や乗り切ってきた介護者の存在を知り、これからの介護を続けるパワーを得ることができると思われる。

介護者教室としての「家族と職員の相互参加型交流講座」は、共通の講義を聴き意見交換を重ねるなかから、介護者と介護に関わるサービス提供者の相互理解だけでなく、対象者への新たな気づきや異なった視点を学びとれる有効な手立てであると感じた。この講座に参加した介護者からの手紙を紹介する。『あらためて、夫は認知症だったと気づいた。徘徊や、繰り返しの訴えに対して個々に振り回されていたが、全体から夫を理解する事ができた。職員とも話ができよかった。ありがとう。』

この講座を生かすためには、討議の進め方も工夫が必要であるし、地域の介護者と介護職員双方に、それぞれからともに学びあう視点、また介護者も他の介護者の話からヒントを得るといった視点が大切であると感じられた。また、抑えるべきポイントはしっかり捉え、活用すべきである事を学んだ。

当たり前の話であるが、介護者教室では介護状況によって求めている内容が異なってい

ることがわかった。

② 認知症介護ボランティア養成講座の開催

<目的>

地域に住む認知症の人を支援するボランティアを養成するために講座を開催した。

<実施状況>

回数	内容とアンケートの結果
1回目 19年 10月 3日 ～ 24日	定員 20 名のところ、参加者 16 名。 3日：講演「認知症について」林田俊弘氏（ミニケアホームきみさんち理事長） 11日：報告「認知症介護体験」介護者 2 名（嫁の立場、妻の立場） 10日～17日：現場実習 至誠キーツスホーム各現場（特養フロアー、認知症デイサービス） 24日：活動報告「地域でサロン活動を展開する」実践者 3 名 参加者の半数は医療福祉関係者であった。また、現在、「介護をしている人」と「介護をすることが予定されている人」の割合が約 4 割であった。参加の理由では「認知症とは何か関心があった」と回答した人が 6 割、「介護に役立てたい」と回答した人が 4 割、「ボランティアをしたい」と回答した人は 1 割以下。 講演や報告そのものに対しては「ためになった」と回答した人が圧倒的であった。現場実習では時間や内容に不満をもたれた人もいた。
2回目 20年 1月 16日 ～ 2月 6日	定員 20 名のところ、参加者 18 名。 16日：講演「認知症について」鉢嶺由紀子氏（やわらぎホーム・西立川施設長） 23日：報告「認知症介護体験」介護者 2 名（息子の立場、妻の立場） 28日～1日：現場実習 至誠キーツスホーム各現場（特養フロアー、認知症デイサービス） 6日：活動報告「地域でサロン活動を展開する」実践者 3 名 アンケートの回答していただいた方が 18 名中 10 名と少なかったが、現在、「介護をしている人」と「介護をすることが予定されている人」の割合が 4 割の 4 名で前回と同じであった。参加の理由では「認知症とは何か関心があった」と回答した人が 5 割、「介護に役立てたい」と「将来の事を考えて」と回答した人がそれぞれ 3 割、「ボランティアをしたい」と回答した人はゼロであった。 講演や報告そのものに対しては「ためになった」と回答した人が前回同様、圧倒的であった。現場実習ではデイサービスに入られた方から、参考になったとの答えが多かったが、特養に入られた方からは、利用者と触れ合う時間がなかったとの不満の声があった。午後の特養では居室で横になられる方もおり、一日で実習を終了させる事の無理が感じられた。
3回目 20年 6月 5日 ～ 26日	定員 20 名のところ、参加者 24 名。 5日：講義「認知症について」安岡厚子氏（サポートハウス年輪・理事長） 12日：報告「認知症介護体験」介護者 2 名（嫁の立場、妻の立場） 16～20日：現場実習 至誠キーツスデイ（認知症デイ 2 単位に各 1 名ずつ） 26日：活動報告「地域でサロン活動を展開する」実践者 3 名、アンケート回答者 17 名。参加者の介護状況は、「現在、介護をしている人」9 名、

	「将来、介護をすることが予定されている人」1名。参加動機では「介護に役立てたい」11名、「認知症に関心があった」5名、「ボランティアをしたい」4名。「ためになった」と回答した人が前回同様、圧倒的であった。しいて言えば、「サロン活動報告」について評価がやや少なかった。現場実習では今までの反省から全員に認知デイに参加してもらったのがよかったようだ。
4回目 21年 1月 16日 ～ 2月 4日	定員20名のところ、参加者30名。 16日：講義「認知症とは」向山晴子氏（都多摩総合精神保健福祉センター医師） 21日：報告「認知症介護体験」介護者2名（嫁の立場、夫の立場） 26～30日：現場実習 至誠キートスデイ（認知デイ 2単位に各1名ずつ） 26日：活動報告と意見交換「ボランティアを展開する」実践者2名 参加者30名中、アンケート回収63%の19名。参加の理由を尋ねると、ボラをして見たい人はわずか3名、介護に役立てたい5名、認知症とは何か関心があった11名。向山先生の講演と介護体験報告の評価が高かった。
5回目 20年 11月 6日 ～ 20 日	「認知症サポーター養成講座」追加研修。定員20名のところ、参加者6名。 6日：報告「認知症介護体験」介護者2名（息子の立場、夫の立場） 10～14日：現場実習 至誠キートスデイ（認知デイ 2単位に各1名ずつ） 20日：活動報告と意見交換「ボランティアを展開する」実践者2名 包括支援センター等で主催の「認知症サポーター養成講座」修了者（約100名）を対象に、その講座では物足りないと考えている人に対し案内し、希望者に追加研修を実施した。受講動機は介護に役立てたい2名、認知症について関心があった3名、ボラをしたい1名。介護者やボラの生の声が聞けてよかった。今後として、職員の体験談を聞きたい、若年性の認知症について知りたい、修了証書があればよかったと言う声があった。

<取り組みの経緯>

受講生募集にあたっては、立川市市報、立川市社協広報、周辺自治会へのチラシ配布(1600枚)を行った。立川市市報に詳しく講座の内容が掲載された時は応募状況が良かった。また、個別に封書で案内した時も同様であった。チラシの配布は反応がよくなかった。なかなか定員に達せず、講座としての回数や実施曜日で参加に限界があるのではと心配したが、立川市より、「認知症サポーター養成講座」の修了生に案内していただき何とか開催にこぎつけた時もあった。ボランティア講座としても必ずしもボランティア志向の人ばかりが参加するとは限らない現実も浮かびあがった。講座に参加した介護者の方々は介護についての学習の場があれば参加したいと願っていることが伺えた。

積極的に案内したわけではないが、講座終了後に数名の方が当ホームの施設ボランティアとして活動している。

(2) 認知症高齢者支援ネットワーク構築事業

① 認知症に関する地域懇談会の開催

<目的>

数年前から立川市の「地域福祉計画」や立川市社協の「地域福祉市民活動計画」の策定で、幸町に立川市社協主催の地域懇談会が開催され、自分たちの地域課題について話し合われている。メンバーは自治会関係者、民生委員、老人会役員、こども会関係者等である。最近は防災をテーマに「防災地域マップ作り」に取り組み始めた。この地域懇談会をベ-

スにして認知症についても話し合い、地域の中に認知症についての理解をはかり、支援する関係作りの構築を狙った。出張型の認知症についてのミニ講座を依頼があれば実施した。

＜実施状況——地域懇談会等——＞

回数	内容とアンケートの結果
1回目 20年2月2日 午前	地域懇談会への参加 「幸町団地」自治会において防災をテーマに地域懇談会が開催され、本事業の地域コーディネーターも参加。参加者はで約40名であった。時間が少なく、認知症について考えていただく機会とはならなかった。
2回目 20年7月7日 午後1時半～4時	当ホームでシンポジウム「認知症の人を地域で支える」を開催。 参加者は定員80名のところ、81名の参加であった。 地域懇談会の開催にこだわらず、シンポを開催。講師は木原孝久先生（住民流福祉総合研究所 所長）で、講演のあと、グループ討議を行った。討議の時間が少なく、「認知症の人や介護者を地域の中で支えるために私たちの出来ること」の話し合いは充分ではなかったがアンケートの結果、今後の地域住民の一人としての生き方に触れたものが多く、講師の話が認知症の人は特別な人というわけではなく自分たちの明日の事柄であること、地域関係は普段からのお付き合いが大切なこと、自分から必要な時は『助けて』と発信しようとの話が示唆的であったことが伺えた。
3回目 20年11月5日 夜間	地域懇談会への参加 幸学習館において「幸町地域懇談会」が開催された。今回は基本に返り現在の幸町で気になっていることや、不安に感じていることを地域住民で話し合おうというもので、地域住民15名が参加した。徘徊される認知症の人が一日中歩いた後、家族により発見された話などを行い、認知症の人をテーマに話し合い出来ないかと提案。
4回目 20年12月19日 夜間	地域懇談会への参加 幸学習館において「幸町地域懇談会」が開催された。出席者は約20名であった。「児童と高齢者の交流会」や防災や防犯対策の一環としての「夜周り」を実施してはとの意見が集約された。認知症のことは取り上げられなかった。
5回目 21年1月24日 1時半～4時	当ホームでフォーラム「認知症の人を地域で支える パート2」の開催。 定員60名のところ参加者は47名。講師は柴田範子先生（NPO法人 楽 理事長）で、講演のあと、グループ討議を行なった。 「認知症の人や介護者を地域で支えるために私たちのできること」をテーマにグループ討議で出された意見は下記のとおり。 ・知識を身につけることで好奇の目を取り除く。 ・一人暮らしの人に関心を持つ。 ・高齢者サロンを立ちあげる。まずは食事会から。一緒に作る事が大事。 ・認知症について勉強をする会を開催し知識を深める。 ・個人情報や緩和して近所・自治会等に支援してもらう。 ・困っている家族がいたら、包括に支援をお願いし、相談に乗ってもらう。 ・他人と思わず、家族と思って声掛けしたら良い。 ・家族は隣近所に認知症の状態を知らせる。 ・気軽に近所の方の面倒をみられるように、地域で顔見知りになっている事が大事。 ・玄関に「高齢者 110 番」の表示を掲げ応援するという意思を表す。見た人もなんとなく安心する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・明日はわが身と言うことを子どものうちから覚える。 ・向こう三軒両隣の意識を持つ。
6回目 21年 3月 6日 夜間	地域懇談会への参加 幸学習館において「幸町地域懇談会」が開催された。出席者は約20名であった。 今回は防災や防犯対策の一環としての「夜周り」を実施しようとのことで具体的に話し合った。当ホームとして継続的に地域懇談会に参加し、認知症についての理解を深めていただく機会としていきたい。

<実施状況——認知症についての出張型ミニ講座——>

期日と対象団体・参加者		
19年11月17日(土) 13時30～14時15分	老人クラブ「若葉会」	30名参加
19年11月21日(水) 19時～21時	自治会「都民ハイム泉町」	15名参加
20年1月16日(水) 10時半～12時	サロン活動「ハッピーサロン」	12名参加
20年3月15日(土) 13時～14時半	立川市内歯科衛生士の会合	15名参加
20年6月4日(水) 13時半～14時半	立川第9中学校3年生「総合」	50名参加
20年7月14日(月) 14時～15時20分	市民グループ	10名参加
20年9月4日(木) 14時～15時半	「レストランさら」	12名参加
21年3月11日(水) 10時～11時半	自治会「立川一番町東団地」	20名参加

<取り組み内容の経緯>

地域懇談会（立川市社協主催）の開催予定がなかなか進まなかったため、市内全域を対象に認知症について話し合い、地域の中に認知症についての理解をはかり、支援する関係作りをやるという方向で20年7月7日にシンポジウムを行った。当初は市報、社協広報誌への掲載、周辺自治体の社協へチラシの設置、自治会へのチラシ配布を行ったが参加の応募者が少なかった。このため立川市の全民生委員とキートスホームのボランティア160名に封書に返信用はがきを入れて案内したところ、一気に参加者が増えた。また、都内の全社協、多摩地域の特養にもFAXで案内したほか、朝日新聞のマリオンにも掲載してもらった。（シンポジウムの結果は上記参照）

また、21年1月24日のフォーラムの時も同様に案内を行ったが、同じようなテーマで前年の12月に市内の6箇所の包括合同主催でシンポジウムが開かれていたため、応募者が少なかった。今回は時間も取れ、グループ討議では熱心な話し合いが行われた。（フォーラムの結果は上記参照）

幸町における地域懇談会は今後も継続的に行われる予定なので、至誠キートスホームとして参加し、なんとか認知症の人を対象とした話し合いにこぎつけたい。

認知症についての出張型ミニ講座については、依頼があれば訪問して講演する予定であった。しかし2名からの申し込みも可能な簡易申込書を添えて自治会に配布してもらったが、申し込みについての反応がなかった。

②認知症支援事例研究会の開催

<目的>

認知症の人の事例研究を通して地域の包括支援センター、居宅介護支援事業所、訪問介護事業所、医療機関等の関係機関とのネットワークを作る機会と考えた。

<実施状況——スーパーバイザー竹中星郎氏(医師)——>

期日	テーマ	発表者
19年11月28日 (43名参加)	「関係機関の支援により在宅生活を送っていたがGHへ入居となったAさんの事例」	シルバンズハウス CM 青木恵子氏
	「様々な問題を抱えながらも在宅生活を送っているBさんの事例」	至誠柏居宅介護支援事業所 CM 塚本美由紀氏
20年2月20日 (26名参加)	「夫婦で通所されていたが夫の入院のため一人での通所により認知症が少しずつ出てきたCさんの事例」	きらめいと立川DS 相談員 島田洋子氏 CW 松尾知恵子氏
	「夫がどんな状態になっても人間らしい対応をしていきたいと望んでいる事例」	立川ケアプランセンターわかば CM 岡 浩生氏

＜実施状況——スーパーバイザー北村世都氏(臨床心理士)——＞

期日	テーマ	発表者
20年6月18日 (参加者30名)	「在宅サービスの利用を拒否する夫が認知症の妻を介護している事例」	至誠キートス居宅介護支援事業所 CM 小平正子氏
	「認知症の両親を課題を抱えた子どもたちが介護している事例」	にんじん立川 CM 竹内恭江氏
20年9月24日 (参加者6名)	「意思疎通困難な利用者とサービスの介入に消極的な介護者(夫)の支援の進め方について」	ケアセンター やわらぎ立川 CM 栗原美幸氏
20年11月19日 (参加者15名)	「アルツハイマー型認知症の妻と認知症の症状が見られ始めた夫の生活を支える」	至誠柏居宅介護支援事業所 CM 清水田津美氏
21年2月24日 (参加者18名)	「独居の認知症の女性・一人で外出し警察に保護された事例」	フェロー介護保険相談センター CM 斉藤直樹氏

＜取り組み内容の経緯＞

事例報告に当たり、市内の居宅介護支援事業所ケアマネに依頼した。どのケアマネも仕事に忙しく、事例の資料の提出が遅く先生方には毎回ご迷惑をお掛けした。当初は、付近の開業医へ研究会への参加を文書を持参して案内したが、参加を得られなかったのは残念であった。スーパーバイザーからは時に厳しいご意見もいただいたが、認知症支援のポイントについて学習できた。また、他の関係機関の参加による事例研究は、ケースの理解が深められると共に、関係機関の相互理解に役立つと考えられる。今後とも継続的な開催が必要であると思った。

(3) 認知症高齢者サロン活動事業

① 高齢者サロン活動情報交換会の開催

＜目的＞

地域の中には「高齢者サロン活動」を始めたい人がいるのではないかと、現在取り組んでいる方々との情報交換の場を設けることにより、そのような人の活動のきっかけになればと実施した講座である。また、はじめは「認知症の人のサロン活動」でなくとも、時間とともに利用者に認知症の症状が出現しても引き続いて「サロン活動」に受け入れてもらえば、認知症の人を地域で支える貴重な社会資源になり意味がある活動と考えた。

<実施状況>

回数	内容その結果
1回目 21年 7月 12日 13時 半 ～ 16時	20名定員のところ、13名参加。 はじめに「認知症の予防について」をテーマに30分間職員が講義。その後、実際に活動をしている4名の方に報告をしていただき、休憩を挟みグループ討議を行った。「サロン活動」の運営を若干支援している立川市協職員も2名参加している。アンケートの結果、参加者は、「サロン活動に参加したい」が4名。「サロン活動を始めたい」が4名。「ためになった」と回答した人が11名いた。今後、サロン活動を始める人は社協に声をかけてほしい、若干の補助があることをお伝えし終了した。
2回目 21年 1月 17日 時 間 は 同 じ。	20名定員のところ、25名参加。 活動報告者6名。前回参加者でサロン活動を始めている2名の方にも報告してもらった。質疑応答で資金の事、会場の確保のこと、男性でやってみたいが地域の活動によっては参加を断られるものがある等の話があった。終了後、関心のある人が何人も報告者に相談する場面が見られた。サロン活動の実践を望む人がおり、継続的にこのような情報交換の場を設けていく必要が感じられた。

<取り組みの経緯>

サロン活動を実践している人は立川市社協に紹介してもらい、受講生の応募は市報、社協広報、自治会へのチラシ配布でおこなった。「高齢者サロン活動」をやってみたい人は地域に存在するようで、2回目の方が参加者が多かった。定期的に開いていく必要性を感じた。

II 事業の経費

項 目	用 途	金 額	
		補助対象経費	補助対象外経費
地域コーディネーター	人件費		1,656,000 円
地域コーディネーター補助	人件費・交通費	1,080,211 円	
事業共通事務費	切手・葉書・文具品	155,148 円	
介護者教室	講師謝礼	22,222 円	
認知症支援ボラ講座	講師謝礼	150,666 円	
事例研究会	講師謝礼	151,332 円	
地域懇談会	講師謝礼	111,110 円	
サロン活動入門講座	講師謝礼	30,000 円	
合 計		1,700,689 円	1,656,000 円
			3,356,689 円

Ⅲ事業に要した人員と時間

準備から当日の運営・報告書作成までを含む。その他はかかわった職員。

項目	地域コーディネーター補助	地域コーディネーター	その他
全体調整	21 時間	24 時間	60 時間
介護者教室 (5 回実施)	225 時間	104 時間	56 時間
認知症支援ボラ講座 (5 回実施)	500 時間	232 時間	54 時間
事例研究会 (6 回実施)	104 時間	48 時間	27 時間
地域懇談会 (シンポ 1 回) (フォーラム 1 回) (懇談会 4 回参加) (出張講座 8 回実施)	242 時間	112 時間	40 時間
サロン活動入門講座 (2 回実施)	70 時間	32 時間	20 時間
合 計	1162 時間	552 時間	257 時間
			1971 時間

Ⅳモデル事業終了後の事業継続

立川市より 21 年度、「認知症支援事業」として当ホームが事業委託を受ける予定で、内容は下記の通りである。また、ホームとしても引き続き、地域懇談会に参加し、認知症についての理解普及に努めたい。

(1) 家族介護者のための講座・研修(4 回程度)

介護者に認知症の介護に関する知識・技術を伝え、相談を受ける。また、参加者同士の輪を作り、地域の中で協力できる体制を作っていく。

(2) ボランティア育成(5 回程度)

認知症高齢者ボランティア講座を開催し、地域の中でボランティア活動を行ってもらおうきっかけ作りとする。修了者にはステッカーを自宅等に掲示してもらおうとともに、立川市の事業である『見守りネットワークボランティア』や『ちょこっとボランティア』に登録してもらおう。

(3) サロン・家族会支援(2 回程度)

在宅の高齢者を支えるための市内で活動しているサロンや家族会等のネットワークを作る。

Ⅴ モデル事業を行ってみてわかったこと

認知症の方を介護している人の集まりである介護者教室は、介護している人同士の交流・意見交換が相互に良い影響を与える。自分の介護体験を聞いてもらう、ほかの人の介護体験を聞く、そのようなやり取りが介護の参考になったり、介護者の心を落ち着かせ、介護の継続に役立つ。介護者教室は身近なところで定期的にかかれる必要がある。また、

繰り返しになるが、介護者教室としての「家族と職員の相互参加型交流講座」は、共通の講義を聴き意見交換を重ねるなかから、介護者と介護に関わるサービス提供者の相互理解だけでなく、対象者への新たな気づきや異なった視点を学びとれる有効な手立てであると感じた。

ようやく地域で男性介護者の会が生まれ出したとの報道があった。介護を仕事の延長で捉えようとするのが男性の特徴で杓子定規的になりやすい。『自分が十分に介護が出来ていないので人にやってとはいえない』と言う人もいた。通常の家族の会とは異なったサポートが必要になる。

ボランティア講座に介護者や就業している人の参加が目だった。講演を聞くだけでなく、その時に介護相談や情報提供、介護者同士の交流、ボランティアとの協働活動などを織り込んだ総合的なものをホームの各部署と連携を取って工夫してやることを今後検討したい。

数名ではあるが、認知症支援ボラ講座の修了生がキートスのボランティアになった。施設ボランティアを始めたことがきっかけになれば、地域でボランティア活動することも期待できるのではないだろうか。

幸町の地域懇談会で認知症支援を地域活動のひとつの柱にとの思いはあったが、当事者以外切実な事柄で無いのでテーマにあげていくことが容易では無いようだ。今後とも、町を歩いていて、気になる人に気軽に声をかけられるような地域の風土を作り上げていく取り組みは大事である。

色々な意味でひと押しふた押しすることで動き出すことがある。例えば、サロン活動入門講座をきっかけにしてサロンを立ち上げた人がいた。地道な支援が求められるところである。

認知症について様々な取り組みが積み上げられて、理解する人が増え、そういう人が自覚して対応していける地域になっていくのではないかと思われた。

以上